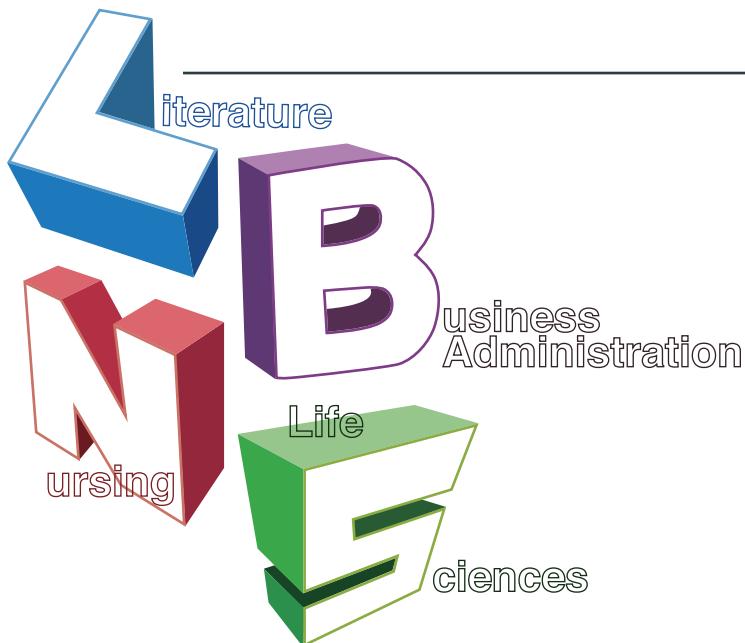


教育研究センター

# Newsletter

Vol. 1

20  
13



## 目次

1. ニュースライン
2. 学長挨拶
3. 教育研究センター長 所感
4. 教育研究センター、この1年
5. ベトナム・シンポジウム報告
6. 研究所報告
7. 書評
8. ICコロキアム報告
9. 大学院研究科報告
10. 言文研叢書紹介

## ニュースライン

### ● ベトナムで、日越シンポジウム開催される

2013年10月にベトナム(ホーチミン市)のホーチミン市外国語情報技術大学(略称HUFLIT)において日越交流40周年を記念するセミナーが開かれ、本学から経営学部教授 井上詔三先生、文学部教授 ディビットC.ヨシバ先生が参加、発表されました。ベトナムは東南アジアの中でいまもっとも注目されている国の一つです。その躍動と日本への熱い眼差しをヨシバ先生にご報告していただきます。



### ● ICコロキアムが始まる

いま、本学では若手の先生方の研究が盛んです。その牽引役を担っているのが「IC若手会」の面々。今年度から教育研究センターとのコラボレーションで、ICコロキアムが始まりました。

文学部教授、江尻桂子先生からのご報告です。



### ● アメリカとの合同研究が本格化(大学院研究科報告)

本センターが力を入れる一つが、本学の大学院研究科の研究です。昨今、活発化するアメリカとの合同研究は何をめざすのか。大学院研究科長、川上美智子先生からのご報告です。

# 茨城キリスト教大学教育研究センターへの期待



茨城キリスト教大学学長 小松美穂子

2013年に設立した教育研究センターが1年目の活動を終えようとしています。本センターは本学教職員の教育・研究・実践を推進するための組織的支援体制の充実を目指し設立されました。

本学は建学の理念をもとにこれまで歴史と伝統をつんできました。そしてこれからも変化する社会状況に対応しつつ、茨城キリスト教大学の特徴と個性を大切に育むことが本学の新たな伝統の創出となります。その具現化は本学の教育であり、それを支える研究です。本センター設立の意義はそこになります。

本学は文学部、生活科学部、看護学部、経営学部そして文学研究科、生活科学研究科、看護学研究科と4学部、3研究科をもち、かなり特徴ある構成となっています。それだけにどの学部・研究科もユニークさをもっています。これからはそれぞれのユニークさを発揮した教育・研究が拡大、深化するとともに、各学部・研究科が連携し、横断的な教育・研究が多く誕生することを期待します。各学問領域の特性を生かした共同関係は本学らしい教育・研究を創りだしていくはずです。

さらなる期待は地域教育研究の促進です。これまで本学は知の拠点として地域に貢献してきました。現在も地域に密着したいくつかの実践活動が地域との協力体制の中で行われ、教育にも反映されています。これらの実践活動が教育・研究と融合され、これまで以上に地域に役立つ知識・技術の発信に繋がることを願っています。また国際的な教育・研究連携も進みつつあります。学部の国際教育はもとより、大学院のこれから国際化を担う機会になると考えます。

このように本センターには学際的教育・研究や地域教育・研究そして国際教育・研究を促進する仕組みと支援の充実が期待されています。

本センターが募集したプロジェクト研究、長期・短期研修等に本年度、多くの教員から申請があり、未来への展望という点で、たいへん心強いものを感じました。研究は研究者本人の自助努力によって成り立ちます。その努力を支える体制がセンターの活動です。その意味で大学構成員がセンターを支え、発展させていきます。ご協力ください。

最後に本センター立ち上げから今日までご尽力くださいました染谷センター長、関係者の皆様に感謝します。



# 気流の変化に備えて—発刊の辞

教育研究センター長 染谷智幸

教育研究センターが本学に設立されてから、一年が経とうとしています。

飛行機のフライトに例えれば、離陸後ようやく雲を抜けて水平飛行に移ったといったところでしょうか。機長の未熟さもあって、決して見事な離陸という訳には行かなかったように思います。それでも、多くの方々、特に、小松美穂子学長、斎藤聖二副学長を始め執行部の皆さん、研究支援委員、カウンセリング研究所、子ども未来研究所、教育研究センター運営委員の先生方に支えられ、ようやくここまで来られたように思います。まずもってお礼を述べさせていただきます。

本センター設立の趣旨につきましては、教授会の場を始め繰々述べさせていただきましたが、本学における教育と研究という両輪・両翼をしっかりと走らせ、羽ばたかせるということに尽きます。

この教育と研究の両立は、今まで諸先輩方が多事多難の中を目指して来られたところでありますが、教育に比べて研究がいさか物足りなかつたのは否めない事実だろうと思います。その研究の環境を整えることで、教員の研鑽はもちろん、学生教育への確かな礎をつくる、ここに本センターの第一の目標があります。

とは言え、この多事多難は、今後ますます厳しさを増すことは必定、特に2020年以後に始まる18歳人口の激減は、大学に改革待ったなしの状況を突きつけています。そうした中、様々な準備と取り組みが行われているわけですが、重要なのは、やはり教育と研究の両輪・両翼がしっかりと大学を牽引することだと思います。

この二つのジェットエンジンがしっかりとていれば、多少の気流の乱れなど恐れるに足らず、未来への安定したフライトを約束してくれるはずです。その為にも、一人一人の先生方が自己の研究に真摯に向き合って欲しいと思います。

この研究に向かう際に問題になるのは、多忙を極める大学環境下、どう研究時間や研究費を確保するかだ、ということはよく耳にします。過日行われました、本学のIC若手会と本センターのコラボレーションによるICコロキアム後の懇親会でも、若手の先生方からの質問が集中したのは、研究時間をどう捻出し成果へと繋げるのかということでした。

「少年老い易く」を引くまでもなく、この古くて新しい問題は、教員研修の充実、会議時間等の縮小など、大学側にも努力が求められます。やはり各自が工夫を凝らす以外に王道はありますまい。ただ、同じ大学という環境下で同じ時を過ごす身であるならば、その少ない時間を割いてでも、相互に刺激し合うことの大切さを私は強調しておきたいと思います。

普通、本学のような小・中規模の大学内での相互交流は、専門性に違いがあって難しいと思われがちですが、それは違います。様々な助成制度の学問分野・体系などが示しているように、文系と理系、人文・社会・自然などの垣根を乗り越えた新しい学問分野が陸続と生まれています。私の専門は文学(日本近世・日韓比較)ですが、昨今の文学研究は他の分野との交流が主となり、例えば環境分野と問題意識を共有するエコクリティシズムなどが生まれてきています。またそれは、種々内向きに走りがちな日本の現状へのプロテストでもあるのでしょうか。

そうした垣根を越えようとする者にとって、本学のように小さいながらも、多彩な専門分野の教員が集まっている教育・研究の場は、極めて魅力的ではないかと思います。私は、この一年、科研費取得のための説明会、研究倫理の勉強会、ICコロキアム等で、異なる分野の先生方が交流する姿を見て、そのことを実感いたしました。また、こうした領域を越える研究こそが、茨城・日立という地域連携とも不可分であることを確信しています。

こうした新しい動きを踏まえつつ、本センターは本学の内外で行われる研究と、それに基づいた教育を可能な限りバックアップするはずです。これからも大方のご理解とご協力を賜りますよう、お願いしたいと存じます。



## 教育研究センター、この一年

教育研究センターの2013／4～2014／3をクロニクル風にまとめました。

2013年

4月

1日：教育研究センター開所、シオン館1Fにセンターを設置

7月

23日：科研費説明会  
講 師  
文部科学省研究助成第一課長代理  
久保智裕氏  
科研費ハンドブックに沿って、科研費取得のためのプロセスと昨今問題になっている研究倫理、研究費使用のためのルールを中心にお話しいただいた。

9月

25日：科研費申請のための講習会  
講 師  
明治大学情報コミュニケーション学部教授  
大黒岳彦氏  
「科研費を自らの研究計画にどう組み込むか」をテーマにご講演いただいた。科研費取得に向けての研究テーマの絞り込み、申請書の書き方のコツなどについて詳細にお話いただいた。



10月

19日：日越交流40周年記念セミナー  
ベトナムのホーチミン市外国語情報技術大学(略称HUFLIT)において日越交流40周年を記念するセミナーが開かれ、本学から経営学部教授井上詔三氏、文学部教授ディビッドC.ヨシバ氏が参加され発表された。  
(詳しくは5ページの報告をご覧ください)



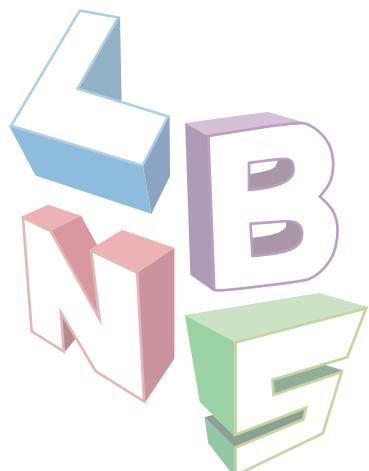
23日：生命倫理・研究倫理講演会

昨今、様々なところで取り上げられている、研究倫理・生命倫理に関する講演会を開催した。講師は上智大学生命倫理研究所客員研究員、有江文栄氏。「人を対象とする研究を行う際、なぜ倫理が必要なのか」「研究者の倫理観と責任感」「倫理的臨床研究の要件」などを中心にご講演いただいた。

12月

25日：ICコロキアム第1回研究会  
発表1 「挑戦ーあらゆる攻撃から生体を守るための看護ー」看護学部看護学科助教金子健太郎氏  
発表2 「糖尿病性血管障害の発症に関わる新規原因物質の解明」生活科学部食物健康科学科准教授、深津佳世子氏  
(詳しくは10ページの報告をご覧ください)

2014年



3月

3日：ICコロキアム第2回研究会  
発表1 「研究の魅力とは—イギリス視覚障害教育史研究を通じて感じたことー」文学部児童教育学科講師、宮内久絵氏  
発表2 「余は如何にして韓流好々爺となりし乎—私にとっての朝鮮問題」文学部文化交流学科教授、染谷智幸氏  
(詳しくは10ページの報告をご覧ください)



## ベトナム・シンポジウム報告

# ベトナムのシンポジウムに参加して

文学部教授 ディビッド C. ヨシバ

2013年10月19日、ホーチミン市にてホーチミン市外國語情報技術大学(HUFLIT)主催による「日越協力関係人材開発教育問題」セミナーに参加した。

当セミナーにはベトナム各大学からの専門家、日田春光駐越総領事、領事館およびホーチミン市の役員などが参加した。また、日本の各大学や機関から4名が参加しHUFLITからは教員、学生あわせて約250名が参集した。

セミナーは前HUFLIT学長および駐越総領事らによる歓迎挨拶で開始された。

その後この日の基調講演者である大喜多富美郎氏がプレゼンテーションを行った。大喜多氏は4年間にわたり経済産業省後援の海外開発プロジェクト日本企業文化講座の議長を務めた方である。このプロジェクトは、HUFLITを含むHCMC地域のいくつかの大学から参加した学生に日本の企業風土についてレクチャーやセミナーを行うものである。

氏は、「日本の企業風土とベトナムの若者」の演題で講演し、ベトナムの日本企業に就職を希望する若者たちに日本の企業風土、労働態度に上手く適応出来るよう日本企業におけるニーズを提供した。

発表では会社側とベトナム人労働者との間では相互理解の欠如からしばしば労働争議、意見の相違等が起り、さらには深刻な問題へと発展するケースもあると注意を促した。また、氏は日本特有の会社の雰囲気など、日本的なビジネス文化を理解することも重要であると指摘し、以下3点をあげた。

1. チームワーク
2. プロセスの価値
3. ものづくりの心

また、日系企業への就職を希望するベトナムの学生に対して会社内でのチームワークの重要性についても言及した。

さらに、ベトナムでは2、3年労働を経験するとすぐに賃上げを要求する傾向があるが、日本の企業ではしばらく時間をかけて従業員の労働状況・パフォーマンスの向上を判断し、それが賃金に反映するもので、このような要求は日本企業としては少々受け入れ難いだろうと指摘した。また、この要求に応じられない従業員の中には会社を去る人も出てくる点を指摘し、ベトナム人従業員と会社との信頼関係構築の重要性、忍耐力の重要性も強調した。

日本からはHUFLITの提携校である仏教大学、茨城キリスト教大学が発表に臨んだ。

仏教大学の高橋伸一教授は大学におけるアクティブラー

ニングプログラムとその効果について講演を行った。このプログラムの利点の一つとして、海外からの留学生の活発なプログラム参加は日本の学生にとっても相互理解に有益であった点を挙げた。しかしながらこのアクティブラーニングは少人数制を取ることからコストの面で割高であるという問題点も指摘された。

茨城キリスト教大学からは経営学部の井上詔三教授が「教育への投資とその経済効果」について発表した。1885年から~1975年における日本の経済成長期で特に初期を例にあげ、中等教育および正規職業教育への投資が経済成長を促進させたことに注目し、また米国と日本における柔軟な人材育成構築の効果についても指摘した。

ではこれらの経験はベトナムの経済成長、企業の発展にどう生かすことが出来るのか。

井上氏はベトナムは中国と同様に直接的投資や海外企業の進出によって経済発展が促進された国である。しかし、更なる発展を遂げるためにはベトナム政府も海外企業もHRD(人的資源開発)への投資が不可欠であると指摘した。

ディビッド・ヨシバは、Wiki利用によるインターネットをベースとした交換授業について発表した。特にこのプロジェクトではこの交換授業により双方の学生間での共同ライティング、情報交換さらには文化交流が直接体験出来ることなどからチームワークが芽生え、これに伴う相互理解の向上、人材育成への効果などを利点に上げた。



最後に、この日の基調講演者である大喜多富美郎氏を囲んでの質疑応答セッションが催された。

このセミナーへに参加して、日本は数々の方法でベトナムの発展をサポートし、そのことによってベトナムは、日本にとって大切なパートナーとなっていると確信した。

ただ一つ残念なことは一部は日本語に翻訳および通訳を介して行われたが、大半はベトナム語から日本語、英語への翻訳や通訳がなかった。その為、ベトナム人以外の参加者にとって少なからず不明瞭な部分が残ったと言える。同じ条件で情報を共有出来るようになってこそ、開発と援助の効率も上がるのではないかというのが正直な感想だ。

(ディビッド C. ヨシバ、文学部現代英語学科教授)

## 研究所報告

# 子ども未来研究所のめざすもの

子ども未来研究所長 原 口 なおみ

## 研究所の発足

茨城キリスト教大学子ども未来研究所は、1年間の準備期間を経て2010年4月に発足した。本学の幼児保育・食物健康・心理福祉・看護の4分野の専門家が、附属幼稚園と協力し、地域の子育てに貢献することを目指して、一般公開の講演会・子育て電話相談・子どもの現場で働く本学卒業生による実践報告会などを企画してきたが、4年間の活動の中で地域社会での子育て支援の重要性と、地域の子育て支援で大学の果すべき役割を再認識した。

## 「ぴっぴ」での研修

2012年2月16日に、所員の研修先として東京都市大学子育て支援センター「ぴっぴ」を選んだのも、大学の運営する子育て支援センターの意味を考えたためであった。「ぴっぴ」は、2004年に同大学の前身、東横学園女子短期大学内に設けられた子育て支援施設で、3名の保育者が常駐するが、何か催しを企画することはなく、主に入園前の乳幼児が保護者とともに、来たい時に来て利用料を払い親子で遊ぶ室の公園といえる。保育者をめざす学生たちも、空き時間にこの「公園」を訪れ、親子と共に時をすごし、考えたことを日誌「ぴっぴノート」として記録提出して教員の指導を受ける。プログラムを持たず、場と時間を共有し、利用者が他の親子との関わりのなかで変わっていく姿を見守る姿勢をつくることが教員の仕事であると、ぴっぴ創設以来の責任者である小川清美教授(東京都市大学人間科学部児童教育学科)からお話をうかがった。8年間で、のべ16万人余の利用があったということであるが、乳幼児の親子が、受け入れてくれる場・時間と場を共有できる人間関係をどれほど求めているか、そのような場では、学



支援センター「ぴっぴ」、従前の図書館を改装



「ぴっぴ」で小川清美教授からお話をうかがう所員生もまた人と関わる力を育てることができるのだということ、そして、一昔前なら自然にできた場を共にする在り方を、意識して丁寧に作らなければならない時代になっていることを実感した研修であった。

## 「びーのびーの」の講演から

この研修を踏まえて、2012年6月2日には、子育て支援NPO法人「びーのびーの」理事長奥山千鶴子氏を招き講演会を開いた。奥山氏は、育児のために退社し、地域とつながりをもたない入園前の親子当事者として、2000年に菊名駅前商店街に、親子のひろば「びーのびーの」を開設した。「びーのびーの」は、横浜市の事業委託なども受けってきたが、当初から支援する側・される側という上下関係ではなく、「子どものふるさと(人生の根っこ)づくりは大人の責任」をモットーに、父親はもちろんシニアボランティアや大学生・中学生など、地域に生きる人々が主体的に活動に参加し、互いにつながる広場を目指してきたという。2013年2月26日には菊名の親子の広場「びーのびーの」と横浜市港北区地域子育て支援拠点どろっぷを、所員が訪問、具体的な運営の仕



子育て支援拠点どろっぷ室内



子育て支援拠点どろっぷの前で、奥山千鶴子氏と所員組みを現場で説明していただいたが、そこで印象に残ったのは、地縁的な町内会やPTAといった旧来の組織と建設的な関係を築いていることであった。たとえば、「びーのびーの」で配布されている「子連れお出かけマップ」は会員の母親が、子育て目線で地域をとらえなおす若い母親の主体的活動であるが、同時に公園などの地域の公共の場を実質的に運営している町内会との出会いの機会となるよう意味づけられているという。古くからの共同体が残りつつ、圧倒的多数の、地域とは無縁の子育て世代が流入してきた横浜という街に、ビジネスの世界で仕事をしてきた奥山氏が乳幼児の母親として結び付き、子育て支援NPOとしてふるさとを創った。この「びーのびーの」の活動は、現代の社会的企業について様々な示唆に富む。

### 大震災と、うれしの子ども図書室

2013年6月1日の講演会には、NPO法人うれしの子ども図書室理事長高橋美知子氏をお招きした。高橋氏は盛岡で35年以上文庫活動を続け、岩手県内各地の学校・幼稚園の子どもたちにお話を届けていました。東日本大震災後の陸前高田で、一瞬にして安心を失った子どもたちが、しなやかにたくましく生きていくためには、つかの間でも荒涼たる現実を離れ、失った幸せを取り戻せる時空が必要だと、子ども図書館の開設を決意、ジャパンプラットホームや東京子ども図書館などから多くの支援をうけて、早くも震災の年の11月25日にトレーラーハウスの子ども図書館ちいさいおうち



講演会風景：被災した陸前高田市のスライド

いおうちを開設した。読書、特に子どものときに物語に夢中になったひと時は、人が自分と出会い、世界と出会う時であり、自己形成の核になる。震災でふるさとを失ったこどもたちの人生の根っこを支えるものとして、ちいさいおうちは造られた。



講演中の高橋美知子氏  
(うれしの子ども図書室理事長)

高橋氏は、自分で育ってくれた本の魅力を、次世代の子どもたちに伝えたいという想いから、故郷盛岡での文庫活動を始めたという。本を読むという個人的な嗜みの中で育った想いが、NPOという世代を超えて地域をつなぐ活動に発展していったのは、高橋氏個人の資質によるところが大きいともいえよう。しかし、私の想いを私の周りの人々に伝え、共に働く仲間を得て子どもの育つるさとを創る、という点では、「ぴっぴ」や「びーのびーの」と同じく、現代の公共性創設の試みといえる。



トレーラーハウスの子ども図書館 ちいさいおうち

### 地域とともに

高橋氏の講演は、5月に開設された日立市立南部図書館の開館を記念して、日立市との共催として行われた。本学は開設以来、地域に根差した大学として近隣の自治体と連携を深めてきた。ヨーロッパの歴史をみれば、キリスト教教会は長らくコミュニティの精神的・空間的中心であった。また、明治以降の日本でも、学校は村落共同体の文化的中心であり、人と人が出会いの場であった。地縁・血縁・職場縁が脆くなりつつある現在、人と人をつなぐ倫理を探り、様々な世代の出会いの場をつくることは、大学がコミュニティのなかで存在意義を認められるために何より必要なことと言えるのではないだろうか。

(はらぐち・なおみ、文学部児童教育学科教授)

# タイム・カプセル2013(力研版)

カウンセリング研究所長 鈴木 研二

100年後にも力研があるなら——。現在の所員は、私を含めてみな、力研からもこの世からも引退していることだろう。2113年の所員はまだこの世に現れていない。この文書が2013と2113をつなぐ貴重な橋になる。私は100年後のみなさんに向けて、これを書くことにする。おれたちはこんなことをしていたんだよ、と。

## コンテンツ① 研究会

盆暮れ正月を除いて、毎週やっている。金曜の夜、2時間程度。メンバーは所員以外にカウンセラー／研究者、大学院生。研究の性質上クローズド・ショップである。

会の決りは次の3点。a. 守秘義務。b.「先生／先輩」を言わない。c. 夕飯を食べて帰る。

ちなみに2月7日の顔ぶれは次の通り(以下敬称略)。北川恭子・隈強一・富樫ひとみ・山根彩・佐藤智子・森俊博・鈴木研二・綱川弘樹・真鍋守栄・立木徹・小松麗・鬼澤俊貴・長谷川康弘。テーマは「三者関係とSST」であった。

研究所員は年1回、外部講師を招いて宿泊研修会を行う。講演やシンポジウムは研究会メンバーや学内教職員にも公開される。今年も3月に、涸沼で。講師は山川紘矢・亜希子夫妻。テーマは「生と死」である。

## コンテンツ② 解離性障害／生きづらさ

日常業務の大半は心理臨床の面接である。(2012年度は730回くらい)。つまり力研は、学生と市民を対象にした、日本で一番歴史の長いカウンセリング・センターなのである。

昨今われわれが、臨床現場で一番悩むのは、解離性障害、あるいはそれに由来する生きづらさの問題(BDS)である。

解離とは性質の異なる二つの心がうまくつながらない状態で、これを抱えると心が割れる。ひどい場合、本人も周りも「何が何だかわからない」。言うことがコロコロ変り、することがバラバラで、一貫性に欠ける。当然、不安定で生きづらい。極端になれば、「死にたい」「殺したい」となる。

成長と治療の鍵になるのは、二つの心をつなぐ力である。この力は人と人の間で働くと愛になる。したがって、解離の研究は愛の研究につながる。

『力研紀要29号』(2013. 7月)は、期せずして、解離／生きづらさの特集号という観を呈している。時宣にかなっているというべきだが、これも、力研がカウンセリング・センターと研究所の二つの機能を備えているからである。

## コンテンツ③ 心を開いたつながり／夢分析

つながり絡みでもうひとつ。人ととの心を開いたつながりは、カウンセリングでは必須のアイテムである。今年は法務局の依頼で、このテーマで、保護司を対象にした講演会を5回引き受けた。(現在進行形)

市民や学生を対象のワークショップもやった。9月に、大洗で、夢分析をテーマに。参加者の感想文が『力研通信125号』に掲載されている。

## コンテンツ④ 財産目録

研究所というものは人である。力研から人を取れば、中古の木造建物しか残らない。どんな人がいるかが、研究所の価値を決める。所員の研究活動こそが財産である。

以下、列記しておく。

榎室佐知子：4月から加わった新人。臨床家。イメージを駆使する技法に持味がある。

北川恭子：臨床家。摂食障害の治療に優れる。イラストが得意。アニメ分析も手がける。『紀要29号』の編集長。

小谷野邦子：坪井賞の選考委員。心理学史の研究者。

斎藤澄子：「能楽「鉄輪」における“うらみ”の構造とメカニズム」。看護学科に所属しているが、能楽の心理分析をよくする。

櫻井由美子：「単発型構成的グループ・エンカウンターのエクササイズによる気分の変化」。生涯発達に关心をもつ臨床家。

鈴木研二：『泥沼モデル』、「生きづらさ、あるいはBDS」、『靈感—知覚の拡張と深化』(出版交渉中)。

靈性の研究がテーマ。心理療法家。夢分析家。

立木徹：「愛がなくなると消えたくなるか？—身体・感情の自己学習」。臨死体験以来、教授学習心理学のほかに、愛と死というテーマが加わった。

富樫ひとみ：『高齢期につなぐ社会関係』。福祉心理学方面も目指すらしい。

飛田隆：「子どもの遊びのなかにある学びについての一考察」。子どもの遊びの専門家。

真鍋守栄：臨床家。病跡学の研究者。近年は村上春樹に取りこんでいる。

望月珠美：障害者心理学の研究者。アニマル・セラピーに関心をもつ。臨床家。

さて——。100年後のみなさん、何が残っている？



(すずき・けんじ、生活科学部心理福祉学科教授)

書評

# 高齢者がソーシャルサポートをする時代 富樫ひとみ著『高齢期につなぐ社会関係』

生活科学部教授 立木 徹

筆者はまえがきの中で、「人はどんな社会関係とどんな力をもてば、幸せを感じるのだろうか？」を問い合わせてきたとその思いを語っている。そして、このテーマに取り組んだ博士論文をベースに、その後の研究を加えて本書を書き下ろしたと書いている。

博士論文を構想している時、高齢者と関わることがあり、その知恵と活力を目の当たりにして感動したそうだ。そのような体験から、高齢者によるソーシャルサポート提供の研究を始めたようである。そして大学院を修了した後、高齢者のボランティア活動研究に関わることになり、全国的な調査研究を進めた。そのような研究の流れがあって、ソーシャルサポートに関する実証的研究が3章、4章に、ボランティア活動研究が5章、6章に報告されている。

このようなことは、まえがきや目次を見ればすぐにわかるはずだけれども、福祉について門外漢の私(専門は心理学)には、本書の全体像を実感的につかむまでかなりの時間が掛かってしまった。書評を依頼された時、私が適任なのかなと思いつつも承諾してしまったツケかもしれない。そんな自分を恨めしく思いつつ序章を読んだが中々に難しい。それならば具体的に書かれたところから、著者の問題意識がどのようなものなのかを見ようと、1章、2章にチャレンジした。すると、ここにはさまざまな研究者の説が紹介されている。私の脳は情報の洪水でパニック状態である。しかし、その中から、著者が多くの文献を読み、まとめ、論文にまで仕上げた、その努力がひしひしと伝わってきた。昼夜を問わず、長い時間をかけて到達した成果がここにある。

作戦変更。これらの章は後回しにして、3章、4章に書かれているソーシャルサポートの実証研究を見ることにした。とくに4章の「高齢者のソーシャルサポート提供についての量的調査」は、数量データになじみのある私にとって読みやすいかもしくないと期待した。ここではたとえば「よその家の家事の手伝い」の頻度(週に2回以上、週に1回程度、月に1回程度、年に数回、年に1回程度、1回もしていない、の6段階)の違いによって、生活満足度が変わるとかという問い合わせるために、1,200人ほどの男性・女性高齢者に質問した調査結果が書かれている。「本人に関する家事以外のサポート提供は本人の生活満足度を高める」という仮説を検証することをねらっているのだ。

まず、頻度と満足度の間の相関関係を見ると、一部に統計的有意差が見られたものの、どの値も0.2を越えていない。この点について、「サポート提供と生活満足度の線形的な相関関係は認められない」と著者は指摘している。私も当然の結果だろうと納得した。さらにデータを細かく見て

いくと、「よその家の子どもの世話」や「誰かの相談相手になったり愚痴を聞いたりした」ことを1回もしていない男性高齢者や、「自分の孫の世話」や「誰かの相談相手になったり愚痴を聞いたりした」ことを1回もしていない女性高齢者の生活満足度が低いことに気がつく。納得できるような気もするが、どんな暮らしをしている人なのか想像の域を出ない。いずれにせよ、どの程度のサポート提供をすることが、高い生活満足度と関わるのか明瞭な傾向を見つけることが難しいようだ。著者はその点に触れて、「適切な提供頻度が生活満足度を高めるという関係性が示唆された」とだけ述べている。適切な提供頻度とはいってい何なのが明らかにならなかったのは残念である。今後の研究に期待したい。

ところで、このような調査データの相関関係を調べる研究について、いつも思うことがある。たとえ提供頻度と生活満足度の間に相関が見られたとしても、それは提供頻度が生活満足度に影響しているとは一義的に言えないという点である。生活満足度の高い人にゆとりが生じるために、サポート提供をしているとも言えるからである。おそらく相互的に影響していると思うのだが、それが明瞭にできないという問題を相関研究は常に抱えることになる。この研究ではその点に触れていないが、常に考えなくてはならないことだと言える。

終わりに興味を持った点を2つほど指摘したい。1つは「ソーシャルサポートのやり取りのなかには互酬性規範の他に相手への配慮という規範がある」と述べていることである。これは、高齢者のインタビューの中で明らかになったことで、サポート提供の相手がきょうだいや友人・隣人の場合、心遣いとして相手の負担にならないように気を配る、という配慮がなされているというものである。もう1つは、サポート提供者の動機に義務感が強かったりすると、社会関係は続かないという指摘である。いずれもサポート提供に心理的要素が強く関わっていることを示唆する指摘である。心理研究者である私にとてもおもしろく思えた。  
(著者: とがし・ひとみ『高齢期につなぐ社会関係』ナカニシヤ出版、3,150円、評者: たつき・とおる、生活科学部心理福祉学科教授)



## コロキアム報告

## 2013年度「ICコロキアム」活動報告

主催：IC若手会 後援：茨城キリスト教大学教育研究センター

文学部教授 江尻桂子

## ■ICコロキアムの趣旨

2013年度、本学において「ICコロキアム」と称する研究会を2度にわたって開催しました。本稿では、このコロキアムの趣旨や、2013年度の活動内容を紹介します。

コロキアムの趣旨としては、本学の教員に、最新の研究や教育の成果を発表していただき、これを参加者である本学の様々な専門領域の教員で共有することで、互いに専門的知識を高めあうことを目指しています。また、こうしたアカデミックな場での交流を通して、教員間のつながりを深め、本学における新たな学際的研究へつなげていくことも目標のひとつです。

コロキアムの企画・運営は、現在、IC若手会(本学の若手教員を中心とした研究会)の有志(今年度は、江尻桂子・宮内久絵・細川美由紀・中村和照)が務め、これを本学の教育研究センターがバック・アップするかたちをとっています。具体的には、発表者への依頼や日程調整、チラシの作成・配布、会場設営と進行役を若手会の有志が行い、教育研究センターには、学内での広報を担当していただいているます。

コロキアム当日の流れとしては、2名の教員が、自分自身の研究や教育実践活動について話題提供し、それをもとに参加者との間で質疑応答を行います。コロキアムに参加する教員や学生は、発表者とは異なる専門分野であることが多いため、発表者は専門外の人にも理解しやすいよう、平易な言葉をつかって研究内容を紹介します。

コロキアムの前身は、2008年度から定期的に開かれてきたIC若手会による定例研究会(本稿末尾に活動報告)であり、これが2013年度に名称変更して新たにスタートしたのが「ICコロキアム」です。年齢や所属、専門領域に関係なく、多くの方々に参加していただくことを目的としての名称変更でしたが、期待通りの成果がありました。

以下では、2013年度に実施した2度のICコロキアムの内容を紹介します。

## ■2013年度ICコロキアムの報告

第1回ICコロキアム(2013年12月25日)では、看護学部看護学科の金子健太郎先生と、生活科学部食物健康科学科の深津(佐々木)佳世子先生に発表していただきました。

金子先生によるご発表「挑戦ーあらゆる攻撃から生体を守るためにの看護ー」では、自律神経活動や末梢循環をふくむ循環動態、呼吸数などを指標とした実験データを

もとに、患者の健康やQOLを向上させるためには、看護においていかなる介入的アプローチが可能であるのかをお示しいただきました(写真1)。



(写真1)

金子先生の研究は、患者というのが単に医療的ケアを享受するだけの存在ではなく、自ら能動的に健康を維持・向上させることができる存在であること、そして、そこに密接に携わるのが看護という学問領域であることを気付かせてくれたものでした。

深津(佐々木)先生によるご発表「糖尿病性血管障害の発症に関わる新規原因物質の解明」では、糖尿病に合併して起こる血管障害の発症に関わる原因物質を突き止めるための一連の研究成果を紹介していただきました(写真2)。



(写真2)

糖尿病性血管障害の発症に関わる未知の機構を明らかにするには、緻密で地道な実験の積み重ねが必要であるということ、それと同時に、新規な原因物質の解明過程は、事件の謎解きをする推理小説のように、ドキドキ、ワクワクさせられるものであることが、深津(佐々木)先生のご発表から伝わってきました。

金子先生、深津(佐々木)先生ともに、その研究成果は、私たちの健康維持や病気の予防に深く関わるものであり、とても身近に感じられた研究でした。両先生が発表された第1回のコロキアムでは、看護学科や食物健康科学科の教員や学生が数多く参加して下さり、ディスカッショ

ンの内容も、専門性の高い充実したものとなりました。

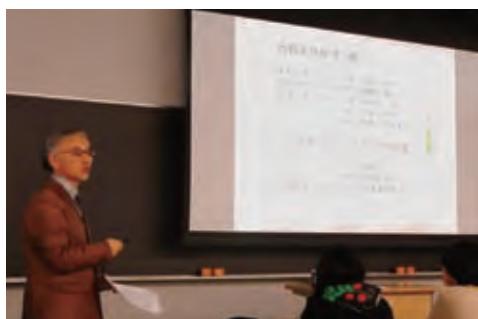
第2回ICコロキアム(2014年3月3日)では、文学部児童教育学科の宮内久絵先生と、文化交流学科の染谷智幸先生に発表していただきました。

宮内久絵先生によるご発表「研究の魅力とは—イギリス視覚障害教育史研究を通じて感じたこと—」では、イギリスの視覚障害教育史に関する文献研究を進めていくなかで、宮内先生が経験した、さまざまな研究の魅力(視覚障害教育に関わる重要な人物との交流や、貴重な資料との遭遇による感動など)についてお話をいただきました(写真3)。また、研究で得られた知見を、我が国における今後の障害児教育や、いま関心が寄せられているインクルージョンに向けての議論に、どのように生かしていくのかについてもお示しいただきました。児童教育学科の教員はもちろん、学生も数多く参加してくれ、皆、ノートをとりながら熱心に聞き入っていました。



(写真3)

染谷智幸先生によるご発表「余は如何にして韓流好み爺となりし乎 一私にとっての朝鮮問題ー」では、井原西鶴に関するこれまでの研究成果をご紹介いただくとともに、韓国の古典文学に関する最近の研究についてもお話しいただきました。また、日本と韓国の文化や国民性の相違に関しても具体的な例をもとに解説いただき、両国の友好関係のためには正しい知識のもとにお互いを理解しようとする姿勢が大切であることをお示しいただきました。我々研究者も、研究という共通の話題を通して、今後はより積極的に韓国との交流を図っていく必要があることに気付かされました(写真4)。



(写真4)

以上、2013年度に本学で実施した、2度にわたるICコロキアムの概要を紹介しました。

先にも述べたように、この会は、若手教員の有志によって始められた会ですが、次年度も継続して開催ていきたいと考えています。コロキアムに参加する方々には、

本学教員による最新の研究・教育実践の成果や、それについてのディスカッションを楽しんでいただき、このことを、明日からのご自身の研究や教育への活力につなげていただくことを願っています。このICコロキアムが、本学における研究・教育活動の活性化に少しでも貢献できるのであれば、これほど嬉しいことはありません。

改めて、ICコロキアムの発表者や参加者の皆様、そして、コロキアムの開催を支援してくださっている全ての方々に、心より御礼申し上げます。

最後に、コロキアムの前身である「IC若手会研究会」による2012年度の活動を紹介させていただき、これをもって本稿の結びとします。

#### ■IC若手会・定例研究会の活動報告（2012年度）

第1回研究会：2012年9月12日

岩間信之(文化交流学科)

「競争的研究資金の獲得の意義とプロセス」

江尻桂子(児童教育学科)

「海外留学・国際学会発表の意義とプロセス」

小松美穂子(学長・看護学科)

「いま、若手研究者に期待すること」

(学長を囲んでの座談会)

第2回研究会：2012年10月2日

Paul Lynch(英国バーミンガム大学)

「開発途上国における障害児教育の現状と課題」・「国際誌への投稿の意義とプロセス—これから国際誌に投稿する人へ—」

第3回研究会：2012年11月2日

天野秀哉(児童教育学科)

「一般大学生の100m全力走における特徴

—疾走速度の変化動態に着目して—」

富成絢子(現代英語学科)

「スポーツ記事の言語学的分析

—ジェンダーの視点から—」

第4回研究会：2013年2月19日(火)

栗原正樹(経営学科)「経営とは何か」(写真5)



(写真5)

中村和照(食物健康科学科)

「長距離ランナーにおける

漸増負荷運動中の血糖値の動態

—新たな持久性運動能力評価方法としての可能性—」

(えじり・けいこ、文学部児童教育学科教授)

## 大学院研究科報告

# 米国 U.C.Davis との大学間連携と共同研究

大学院生活科学研究科長 川 上 美智子

2012年度の茨城キリスト教学園・未来経営戦略推進事業の1つとして、2013年2月、大学院文学研究科、生活科学研究科、看護学研究科は大学間連携のため、アメリカ・カリフォルニア州のU.C.Davisを訪れ、Department of Environmental ToxicologyのDistinguished Professorの称号を有される柴本崇行教授の旁により5月に両大学の連携協定を結んだ。生活科学研究科では、同時に柴本教授との共同研究協定を結び、8月には「オレンジニンニクの機能性研究」のプロジェクトを立ち上げ共同研究をスタートさせた。本研究の最終結果が出るまでには2~3年を要すると思われるが、現在、成分分析や動物実験を進めているところである。



U.C.Davisの副学長William Lacy、Adrienne Martin教授、柴本教授を訪問

ところで、ニンニクは、アメリカの癌研究所が癌を抑制する植物性食品・デザイナーズフード・ピラミッドのトップに位置づけているように、活性酸素消去能など種々の機能性が知られている重要な農産物である。日本では、それを加工した黒ニンニクがいわゆる健康食品として販売されている。一方、オレンジニンニクは、最近、茨城で開発された特殊加工を施したニンニク加工品で、温州ミカンの房のようなオレンジ色と感触、マイルドな香りをもつて特長とする。冷蔵庫で長期保存が可能など、生ニンニクに比較して抗菌性が高く、新商品として大いに期待されるものである。開発者から研究を依頼され、揮発性のヘッドガス香気成分については学会発表を済ませたところであるが、機能性がさらに高いと思われる不揮発性成分の分析やオレンジニンニクを摂取したときの生体への機能を解明するため、現在、多方面からの研究を進めている。なお、本研究プロジェクトは、2013年度本学教育研究助成金、及び2014

年度本学教育研究センタープロジェクト助成金(2年間)の受託研究として実施している。

U.C.Davisとの連携は共同研究のみにとどまらず、今後、教員、大学院生、学部生の研修の場として拡げて行きたいと考えている。

2014年2月には、大学院の食物健康科学専攻の学生1名と教員4名が再び大学を訪問し、短期間ではあったが交渉や研修を行い更なる絆を深めた。



B.German研究所長の案内でFood Science & Technologyを見学

今回の交渉では、具体的に教員の研修を受け入れていたらしく研究室の教授との顔合わせとラボ見学、看護学研究科が設置されているサクラメント校舎や病院のシミュレーションラボなど最新施設の見学、本学の大学院生(学部生含む)と教員のための短期英語研修(2月~3月、2週間)コースの開設などについて時間をとっていただいた。

3月には生活科学研究科と看護学研究科共催のFD研修に柴本崇行教授をお招きし、「米国の大学に於ける研究活動と教育活動:歴史と現状」と題して、アメリカの大学教員の研究と教育の活動状況や授業法などの話を伺う機会も設けることができた。

ところで、文部科学省は2009年から5年間、国際化を推進する大学拠点づくり(グローバル30)を推進し、中央教育審議会は2011年に「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」を答申しており、大学院の教育研究における国際化は今後避けられないテーマであると認識している。本学では、学部レベルの国際理解を進めるプログラムがいくつか進められているところであるが、大学院レベルの講座や研修機会については未設置の状況にあり、今回の取り組みはその端緒を開くものとして継続して推進して行きたいと考えている。



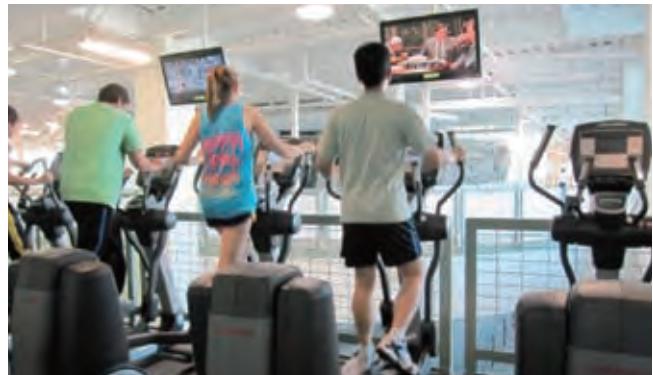
分析機器がずらりと並ぶEnvironmental Toxicologyの研究室



卒業生Robert Mondaviが寄付したInstitute of Foods for Healthの建物 ワイン醸造実習室では最新の機器を駆使して世界一のワイン研究が行われている



101の学士、90の修士課程を有する全米一の人気大学  
スポーツでもU.C.Davis Aggiesは大活躍



日曜日も、体育館で、学生たちは自らのからだづくりに励む  
(かわかみ・みちこ、生活科学研究科教授)

## 紹介 本学所蔵の逸品

### 川瀬巴水の水彩画 『茨城キリスト教学園の四季』

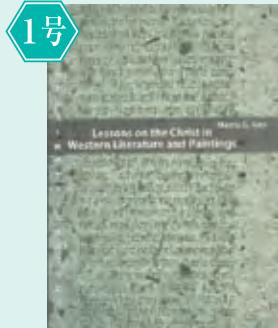
2013年は、大正から昭和にかけて活躍した風景画家、川瀬巴水(かわせ・はすい)の生誕130年に当たります。それを記念する展示会が、千葉市美術館を始め全国にて開かれています(2013年11月26日～2015年1月12日)。この全国の展示会に本学所蔵の巴水の4枚の水彩画も出品、下のものはその一枚で「冬の茨城キリスト教学園」です。昭和25年(1950)年頃、現11号館あたりから学園正門方面を遠望したもので。なお、2015年3月に、巴水に造詣の深い作家の林望(はやし・のぞむ)氏を本学に招いて、講演会並びに展示会を図書館主催で行う予定です。



# 言語文化研究所叢書既刊一覧



**7号**  
**高齢期につなぐ社会関係**  
 —ソーシャルサポートの提供と  
 ボランティア活動を通して—  
 富樫ひとみ著  
 ナカニシヤ出版(2013/3)



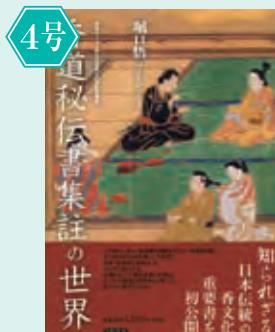
Lessons on the Christ in  
 Western Literature and Paintings  
 ハリスG.アイヴス著  
 春風社(2004/3)



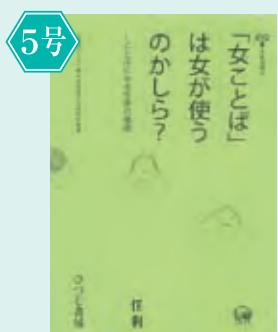
陶淵明像の生成  
 —どのように伝記はつくれられたか—  
 上田 武著  
 笠間書院刊(2007/3)



日本人の中国民具収集  
 —歴史的背景と今日的意義—  
 芹沢知広・志賀市子編  
 風響社(2008/3)



香道秘伝書註の世界  
 堀口 悟編著  
 笠間書院刊(2009/3)



「女ことば」は女が使うのかしら?  
 —ことばにみる性差の様相—  
 任 利著  
 ひつじ書房(2009/12)



冒險 淫風 怪異  
 —東アジア古典小説の世界—  
 染谷智幸著  
 笠間書院(2012/3)

## 編集後記

校長と初めて握手卒業す 新子

教師なら覚えのある方も多いだろう、卒業式で、記憶にあまり残っていない学生に感謝され、いさか落ち込んだことが。この赤澤新子の俳句に出会ってから、そんな考えを改めた。卒業式は別れの場のみにあらず出会いの場でもある、そこから始めれば良いのだと。この3月でセンター長を退く私が、こうしてニュースレターをお届けするのも、新しい出会いのための「握手」と考えたい。

その握手ではないが、本学における教育と研究がしっかりと結び付いて、本学を牽引する原動力となることを願ってやまない。

なお、本ニュースレターのデザインは本学兼任講師の韓希暉(はん・ひきよん)さんにお願いした。言文研ニュースレターからのご縁である。本学4学部・3研究科の学問を上手くシンボライズしていただいたことに心より感謝したい。(染谷)

## 教育研究センターNewsletter Vol.1 2013

発行者 茨城キリスト教大学 教育研究センター  
 発行責任者 染谷智幸  
 発行日 2014年3月25日  
 印刷 日立高速印刷株式会社